

民主化・分権化期のインドネシア地方社会における 劇場国家の「再現」

——西カリマンタン州のダヤック人「王国」を事例とした考察——

西 島 薫*

The “Return” of a Theatre State during Indonesia’s Democratization Period: The Case of the Dayak “Kingdom” in West Kalimantan Province

NISHIJIMA Kaoru*

Abstract

This paper argues that the theatre state has “returned” among the Dayak people of West Kalimantan Province, Indonesia. The concept of the theatre state, developed by American anthropologist Clifford Geertz to describe pre-colonial Balinese kingdoms, has been controversial. Subsequent research argued that the model was better applied to the colonial era when the separation of the kingdoms’ ritual authority and political power was advanced. The paper finds that the theatre state has “returned” during the democratic period by an un-doing of this separation via the elevation of kings as customary authorities. The paper first clarifies the backdrop of this “return,” in which enduring conflicts between development/extractive companies and locals create fertile ground for the rise of kings who can mediate based on *adat*. Second, the paper investigates how the Dayak king has constructed relationships with the secular authorities as the customary authority of Dayak people. Third, the paper describes the ceremonies of the kingdom, through which the Dayak people actualize their theatre state.

Keywords: theatre state, Indonesia, West Kalimantan, *adat*, local politics, Dayak

キーワード：劇場国家, インドネシア, 西カリマンタン州, アダット, 地方政治, ダヤック

* 公立小松大学国際文化交流学部：Faculty of Intercultural Communication, Komatsu University, 10-10 Doihara-machi, Komatsu 923-0921, Japan
e-mail: kaoru.nishijima@komatsu-u.ac.jp
DOI: 10.20495/tak.25003

2025 年 3 月 28 日 掲載決定, 2025 年 7 月 7 日 J-STAGE 早期公開

はじめに

19 世紀以降、オランダ植民地政府は、現在のインドネシアに相当する地域のうち、ジャワ島とマドゥラ島を除いた外島地域を中心に、大小の王国を媒介とした間接統治体制を構築した。しかし、インドネシア独立とともに、各地の王国は廃絶したため、王侯貴族たちは、地域社会の統治者としての地位を追われた。¹⁾ インドネシア独立期、王侯貴族たちは、一部の人々から植民地支配や封建的権威の象徴とみなされ、糾弾された [Klinken 2007: 150; 永渕 2007: 183]。さらに、土地改革により土地の所有面積に制限が加えられたため、旧王国の末裔たちは、政治経済的な基盤だった土地権を喪失した [Kurniadi 2019: 9]。そして、スハルト体制期 (1966-98) には、旧王国の末裔たちの大半は政治経済的な基盤を失い、地域社会の中に埋没し、その存在は忘却された [Klinken 2007: 150; Cribb 2006]。しかし、1998 年 5 月のスハルト体制崩壊に続く民主化・分権化期、地方各地で、旧王国の末裔たちが台頭した [Klinken 2007; Song and Mansur 2021; Cribb 2006]。末裔たちは、新たに王を即位させ、改修された王宮にて、盛大な式典や儀礼を開催するようになった [Klinken 2007]。地方メディアのニュース記事や SNS では、一部の末裔と追従者たちは、その存在に法的な根拠はないものの、「王国 (In. kerajaan/kesultanan)」や、インドネシア語で伝統、慣習や社会規範などを指すアダット (In. adat) を付して、「アダットの王国 (In. kerajaan adat)」と表現されてきた²⁾ [e.g. Detik.com 2022/12/10; Republika 2022/10/04]。

民主化・分権化期の「王国」は、地方政治エリートや地方政府と協力関係を構築することで、「復興」を果たしてきた。例えば、東カリマンタン州クタイ・クルタヌガラ県の旧クタイ王国では、2001 年に、新たな王が即位した。2002 年、県政府は、旧クタイ王国の新たな王宮を建設した [Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan 2018]。さらに、県政府は、旧クタイ王国の末裔たちとともに、新王宮で祭典を開催してきた³⁾ [DISKOMINFO Prov. Kaltim 2023/09/24]。また、西カリマンタン州クタパン県の旧マタン王国でも、2009 年、3 人の「王子 (In. pangeran)」から構成される評議会が設立された [Pontianak Post 2009/12/22]。当時のクタパン県知事 (在任期間: 2000-10) が、マタン「王国」の末裔組織と緊密な関係にあったこと、そして「王子」のひとりが県議会議長だったこともあり、旧マタン王国の「復興」が進められた。王宮では、定期的に文化行事が開催され、県知事や県議会議員などの地方政治エリートや地元住民たち

1) かつて現在のインドネシアに相当する地域に存在した王国の王は、スルタン (sultan)、パネンバハン (panembahan)、ラトゥ (ratu) やラジャ (raja) など、様々な称号で呼ばれてきた。本稿では、煩雑さを回避するために「王」と総称する。

2) 本稿では、インドネシア語の表記の前には「In.」を付す。

3) 旧クタイ王国では、インドネシア独立後も、不定期で王宮儀礼を開催していた。しかし、2 年に一度、文化祭として開催するという形式は、2013 年から開始された。

が、行事に参加してきた⁴⁾ [e.g. *Tribun Pontianak* 2017/09/19]。

本稿は、西カリマンタン州クタパン県で台頭してきたダヤック人たちの「王国」の事例に焦点を当てる。インドネシア独立以前まで、クタパン地域の主要河川であるパワン川の下流部と上流部に、「キョウダイ」関係にあるとされていた一対の王権があった [西島 2020; 2021; 地図 1 参照]。パワン川下流部を拠点としていた、ムラユ人の王国であるマタン王国の王侯貴族たちは、クタパン地域の政治経済的な統治者だった [西島 2021: 44–46]。他方、パワン川上流部の支流であるクリオ川流域を拠点としていたウルアイ王は、ダヤック人の王権であり、政治経済的には無力であるものの、儀礼的権威を保持していた [西島 2020: 122; 2021: 45–46]。19 世紀以降のオランダ植民地体制期の資料の中では、ウルアイ王の存在には言及されているものの、管見の限り、統治機構を備えたダヤック人王国の存在を示唆する文書はない [Dewall 1862]。また、イスラーム化する以前の西部カリマンタンの王国は、非ムスリムの王国だった。そのため、ウルアイ王国が存在したとすれば、オランダ植民地期以前に遡るはずである。

現地の起源神話によれば、マタン王とウルアイ王は、「キョウダイ」関係にあったとされていた [Djuweng 1999: 106–107; 西島 2020: 123]。年長系の王であるウルアイ王が、年少系の王であるマタン王国の王の統治を承認していた。他方、世俗的権力者だったマタン王国の王に対して、起源神話上の年長の王だったことは、ウルアイ王の儀礼的権威の源泉でもあった。以上のような意味で、両者は相補的關係にあった [西島 2021: 46]。しかし、インドネシア独立期にマタン王国が廃絶したため、ウルアイ王だけが存続した [同上論文: 50]。スハルト体制末期までには、地域社会の多くの人々の間でも、ウルアイ王の存在は忘却されていた。しかし、民主化・分権化期、ウルアイ王は、再び、人々の注目を集めるようになった。クタパン県政府は、ウルアイ王が毎年主宰する神器祭祀を支援するようになり、西カリマンタン州各地からは、大勢のダヤック人たちが、神器祭祀に参集するようになった [同上論文: 61]。2020 年以降、宰相 (patih) や慣習長 (domong) など、ウルアイ王直属の慣習的権威者たちが任命された。

本稿との関係で重要なのは、2020 年に、ウルアイ王によってジャガ・パティ宰相 (Patih Jaga Pati; 以下、宰相と略) という称号が授与された、当時、クタパン県政府の高官だったダヤック人の Q 氏である。⁵⁾ 称号授与の翌年、Q 氏は、県政府の最高位の官僚である官房長官 (Sekretariat Daerah) に任命された。⁶⁾ Q 氏は、後背地各地の、ダヤック人たちと伐採企業や油ヤシ企業などの開発企業との紛争を仲裁し、みずからの宰相としての指導力を示すことで、行政的地位と

4) 旧マタン王国で、王ではなく 3 名の王子が任命された背景には、旧マタン王国の最後の王に、直系の子孫がいなかったことが関係していると考えられる。

5) ジャガ (In. jaga) は「守護」、パティ (In. pati) は「中核」を意味することを踏まえるならば、「中核を守護する宰相」という訳になる。

6) 2024 年 9 月、Q 氏はクタパン県知事選挙へ出馬したため、官房長官を辞任した。同年 11 月の投票において、Q 氏は県知事に当選した。

慣習的地位を両立させてきた [地図 1 参照]。Q 氏の影響力の大きさを端的に示すのは、2024 年にクタパン市内に建設された、宰相の称号を冠した集会所である。⁷⁾ Q 氏が、同年 5 月に主宰した集会所の落成式には、クタパン県知事、県議会議員、地方政府の役人など地方政府の代表者たちだけでなく、各民族組織の代表者やダヤック人の慣習的権威者たちなどの地方社会の有力者たちも参集し、集会所の完成を盛大に祝福した [DPRD Kabupaten Ketapang 2024/05/04]。ウルアイ王は、Q 氏の宰相としての慣習的地位を保証する権威者として、落成式に参加した。落成式を通じて、かつての上流のウルアイ王と下流のマタン王の相補的關係が、ウルアイ王と宰相の關係として復活したことで、「王国」が「再現」された。本稿では、民主化・分権化期に、ウルアイ王と宰相の相補的關係によって「再現」された「王国」のことを、ウルアイ「王国」と呼ぶ。⁸⁾

民主化・分権化期の「王国」は、地方社会で開催される大小様々な式典や儀礼を通じて顕在化されてきた。この点で、「王国」は、東南アジアの伝統的國家のモデルとしてギアツが提起した劇場國家の延長上で理解できる。ギアツは、王宮儀礼における壮麗な演出により、王国の正統性の基盤である超自然的秩序を顕現させることを目的とした劇場國家を提起した [ギアツ 1990]。劇場國家論によれば、王宮儀礼とは、「王＝神」を頂点とした王國的秩序を顕現させるために、王、司祭と農民たちが演じる集団演劇だった [同上書：12, 123]。インド的宇宙の模型としての王宮は、演劇上演のための「舞台装置」であり、國家機構は、演劇開催のために物資や人員を動員する「仕掛け」だった [同上書：12-13, 129-137]。王宮での集団演劇によって現出する王國的秩序は、社会的秩序の模範であり、王宮儀礼は、王国を統合するための求心力として作用した [同上書：129]。ただし、その後の研究では、劇場國家は、伝統的國家ではなく、オランダ植民地体制により近代國家に組み込まれた王国と符合することが指摘された [永淵 2007: 59; Schulte-Nordholt 1981: 474; 1996: 334]。さらに、永淵は、インドネシア独立後のバリにおいて、旧王国の宗教的權威を継承した宗教組織パリサダ・ダルマ (以下、パリサダ) と、政治權力の担い手である地方政府が結合することで、植民地体制期の劇場國家が再現されたことを指摘した [永淵 2007: 267]。民主化・分権化期の「王国」の台頭も、アダットの権威者として台頭した王と、政治權力の担い手である地方政治エリートや地方政府が結合することで台頭を果たしてきたという点で、植民地体制期の劇場國家の再現として理解できる。ただし、民

7) 厳密にはクタパン市 (kota Ketapang) という行政単位は存在しない。一般的に、クタパン市という場合には、おもにクタパン県の中心地であるデルタパワン郡を指す。

8) 2020 年頃まで、ウルアイ「王国」は、儀礼において、ダヤック人たちが「王国」の存在を仮設し、その存在を前提に振舞うことで、「仮定的」國家 (“as-if” kingdom) として顕在化されてきた [Nishijima 2022; cf. Scott 2009]。しかし、2020 年以降は、宰相の登場により、ウルアイ「王国」の現れ方は大きく変化した。別稿は 2020 年頃までの事例を対象としていたため、本稿のウルアイ「王国」の定義とは異なっている。また、本稿の議論は別稿の議論とはいくつかの点で異なっている。これまでの議論との異同に関しては、適宜、注にて説明を加える。

主化・分権化期の「王国」の「復興」の要因や経緯は、地域によって異なるはずである。本稿の目的は、ダヤック人「王国」を事例に、いかに民主化・分権化期の「王国」が、劇場国家として「再現」されているのかを明らかにすることである。⁹⁾

本稿の構成は、次の通りである。I章では、劇場国家論に関する先行研究を概観し、本稿の視座を提示する。II章では、ウルアイ王の台頭の背景として、開発企業と住民たちの関係の変化に焦点を当てる。とくに、スハルト体制期末から民主化・分権化期にかけて、住民たちの開発にたいする抵抗の焦点が、開発企業による強引な開発の拒否から、アダットを用いた仲裁に移行してきたことを指摘する。III章では、ウルアイ王、ダヤック人の慣習的権威者や地方政治エリートたちが、アダットを根拠として、両者の紛争を仲裁してきたことを明らかにする。さらに、宰相が各地で仲裁儀礼を実施することで、ウルアイ王と宰相の相補的關係が構築され、ウルアイ「王国」の構造が顕在化したことを指摘する。IV章では、宰相が主宰した集会所の落成式に焦点を当て、いかにウルアイ「王国」が「再現」されたのかを明らかにする。結論では、本稿の議論をまとめると同時に、民主化・分権化期の「王国」を理解するための視座を提示する。

本稿では、筆者の2014年9月から2016年3月までの西カリマンタン州クタパン県における長期調査と、その後、断続的に継続してきた短期調査のデータを用いる。また、2020年から2022年まで短期調査を中断していた期間と、筆者が現地に滞在していない期間に起こった出来事に関しては、オンラインニュース記事、SNS上にアップロードされた動画、そしてインタビューで得られた情報を参照した。とくに、III章とIV章の記述は、地元メディアのオンラインニュース記事、ウルアイ「王国」の広報役を兼務する地元ジャーナリストや、地元メディアがSNSに投稿した映像を参照した。また、近年、地方社会では、小規模なオンラインニュースメディアが乱立している。小規模なオンラインニュースメディアによる記事は、大手ニュースメディアが取り扱わないような、地方社会の細かな出来事の情報源として有用である一方、記事の情報の正確性に関しては、十分に担保されているとは言い難い。本稿では、小規模なオンラインニュースメディアによる記事を参照する場合は、記者もしくは編集者の名前が記された記事を参照する。SNS上の動画を参照した場合には、脚注に参照元のURLを記載する。

I 本研究の視点と対象

1. 民主化・分権化期の慣習的権威者

本稿では、劇場国家論と、その後の劇場国家に批判的な先行研究の延長線上に、民主化・分権化期の「王国」を位置付ける。本節では、ギアツの提示した劇場国家のモデルが、植民地体

9) 管見の限り、ウルアイ「王国」が、オランダ植民地体制に組み込まれたことを示す資料はない。そのため、ウルアイ「王国」の事例に関して、再現という言葉を使う場合には、括弧を付す。



地図 1 西部カリマンタンの地図

出所：idn_adm_bps_20200401 をもとに筆者作成

制下の王国の姿と符合すること、そして、インドネシア独立後のバリにおいて劇場国家が再現されたという先行研究の指摘を踏まえた上で、民主化・分権化期の「王国」を理解するための視座を提示する。

東南アジアの伝統的国家のモデルとしての劇場国家論には、様々な批判が向けられてきた [Schulte-Nordholt 1996; Tambiah 1985]。タンバイアは、ギアツの劇場国家論が、王宮と村落社会の極端な分断を前提としている点や、王宮と王宮に従属する衛星国の流動的かつ不安定な関係を看過している点を批判した [Tambiah 1985: 319–321]。シュルトノルドホルトは、タンバイアによる劇場国家論への批判を踏まえた上で、バリのムンウィ王国を事例に、王宮の軍事平定と衛星国の反乱、王宮と衛星国との外交、王と追従者たちの主従関係、祭司間の序列、交易、婚姻連帯、灌漑の建設と管理や王宮儀礼を仔細に描き出すことで、バリの王国の重層的かつ流動的な政治過程を明らかにした¹⁰⁾ [Schulte-Nordholt 1996]。また、バリの王国は、19 世紀以降のオランダによる植民地化の過程で、植民地政府の行政機構に併合され、政治的流動性を喪失した。植民地政府は、バリの村落社会を自律的で平等主義的な共同体として理想化した一方、

10) シュルトノルドホルトは、劇場国家論とは別の観点から、王国にとって儀礼が重要だったことを指摘した。シュルトノルドホルトは、植民地期以前のバリの人々にとって、自然災害、戦争、不作や疫病などの災厄を原因とした死の恐怖が、現代よりも切迫していたことを指摘した [Schulte-Nordholt 1996: 11]。災厄により王国が不安定化した時、王宮儀礼は、王と王宮を頂点とした超自然的秩序を回復させると同時に、人々の生命に加護を与えるために重要だった [ibid.: 11, 119, 149–150]。

王宮を専制的支配者とみなし、両者の分断を促進した [ibid.: 230–233]。近代国家の行政機構に組み込まれた王侯貴族たちは、宗教的権威として、その役割を固定化された [ibid.: 266, 334–335]。シュルトノルドホルトは、植民地政府の下で近代国家に組み込まれたバリの王国こそが、劇場国家と符合することを指摘した [ibid.: 334]。換言するならば、東南アジアの伝統的王国のモデルとしてギアツが描いた劇場国家は、近代国家の浸透によって、政治的権力と宗教的権威、および王宮と村落社会が分離された結果として誕生した王国の姿だった [ibid.: 334; Schulte-Nordholt 1981: 474]。

オランダ植民地支配下の劇場国家の構図は、インドネシア独立以降のバリでも再現された。永渕は、ヒンドゥ・バリの総本山として位置付けられたブサキ寺院での大規模儀礼を通じて、劇場国家が再現され、王国的秩序が回帰したことを指摘した [永渕 2007]。旧王国が担っていた宗教的権威は、インドネシア独立後、パリサダに継承された [同上書：186]。パリサダは、ヒンドゥ・バリの国家による公認宗教化と同時期に設立された、公的な宗教組織である [同上書：175–176]。パリサダは、古文書の解説を通じて、ヒンドゥ・バリの宇宙論を再構築し、儀礼を設計する役割を担った [同上書：176, 227–232]。そして、行政回路により物資と人員の動員を担う州政府が主宰するブサキ寺院での大規模儀礼において、パリサダによって再構築された宇宙論が顕在化した¹¹⁾ [同上書：218, 227–229]。他方、インドネシアの独立闘争と治安の悪化、自然災害や共産党員の虐殺による社会不安、そして、市場経済の浸透など、その時々時代の変化を経験した人々は、バリ社会の宗教的浄化や個人的名誉の誇示などの理由から、大規模儀礼に関わってきた [同上書：235]。宗教的権威であるパリサダと、政治権力の担い手である地方政府が結合することで、植民地体制下の劇場国家が再現され、王国的秩序が回帰した [同上書：10, 59, 235, 267]。

民主化・分権化期に台頭した王たちの中にも、地方政治エリートや地方政府と協力関係を構築したものもいた。ただし、王と政治権力が協力関係を構築した背景、王と政治権力の結合の経緯や様態、そして、「王国」の現れ方は、インドネシア独立期バリの劇場国家の再現とは異なる。バリの劇場国家と民主化・分権化期の「王国」の再現には、次の三つの相違点が指摘できる。第一に、パリサダが宗教的権威を担った背景には、ヒンドゥ・バリの宗教としての公認化という、バリ特有の事情があった [同上書：176]。他方、民主化・分権化期の王たちが、アダットの権威を担うようになった背景には、スハルト体制末期以降のアダット復興があった。国家の「安定」と「開発」を最優先の課題に掲げていたスハルト体制は、土地や天然資源などへの慣習的権利の主張の根拠になると同時に、開発の妨げになる可能性のあったアダットを抑

11) パリサダと地方政府の分業体制が成立した背景には、様々な要因がある。そのひとつに、パリサダが独自の財源を持っていなかったため、政府が財政的にパリサダを支援しなければならなかったことがある [Stuart-Fox 2002: 318–320]。

制するために、国家の統制下においてきた [杉島 2006: 235]。しかし、スハルト体制末期以降、アダットは、抑圧されてきた人々の慣習的権利の主張や抵抗の根拠として用いられるようになった [Henley and Davidson 2007]。第二に、バリでは、パリサダの宗教的権威が、国家の承認に裏付けられていた一方、民主化・分権化期の王たちの地位には、かならずしも法的根拠があるわけではない。王たちが、みずからの権威の正統性を獲得するためには、民主化・分権化に適応する必要がある、王たちの中には、アダットの権威者としての役割を担うものたちもいた。第三に、パリサダと地方政府は公式的な協力関係を結んでいた一方、王たちと政治権力はかならずしも公式的な協力関係を結んできたわけではない。そのため、両者の結合の経緯や様態には様々なバリエーションがあることが推察できる。また、王と政治権力の結合の経緯や様態が多様であるならば、「王国」の再現のされ方に関しても、様々なバリエーションがあるはずである [cf. Song and Mansur 2021]。

上記の相違点を踏まえた上で、本稿では、第一に、ウルアイ王が、アダットの権威者として台頭した背景として、開発企業と住民たちの関係の変化に焦点を当てる。とくに、スハルト体制末期から民主化・分権化期にかけて、開発企業と住民の紛争において、仲裁が重要性を増したこと、および、仲裁にアダットが用いられるようになったことを指摘する。第二に、ウルアイ王が、開発企業とダヤック人たちの紛争の仲裁者として活動することで、アダットの権威者として台頭したこと、さらに、仲裁を通じて、世俗的な有力者たちと協力関係を構築してきたことを指摘する。第三に、宰相が主宰した集会所の落成式を事例に、ウルアイ王と宰相との間で相補的關係が構築されたことで、劇場国家としてのウルアイ「王国」が「再現」されたことを指摘する。

2. 本研究の対象

本稿の対象となる地域は、西カリマンタン州最南端部に位置するクタパン県である。2023 年時点のクタパン県の人口は、約 59 万人である [BPS Kabupaten Ketapang 2024: 1]。クタパン地域の沿岸部には、おもにムラユ人やジャワ人などのムスリムが居住している。クタパン県内のムスリムの人口は、約 38 万人である [ibid.: 201]。また、クタパン市内には、華人たちも多く居住している。他方、後背地には、非ムスリムの在来民であるダヤック人たちが居住している。ダヤック人たちは、居住地域や方言によって約 150 のサブグループ (In. subsuku) に分類することができる [Bamba 2008]。インドネシア独立期以降、ダヤック人たちの間で「民族」としての連帯意識が高揚してきた一方、現在でも、後背地のダヤック人たちの生活では、居住地域や方言に基づいた集団意識が重要な位置を占める。20 世紀初頭以降、ほとんどのダヤック人たちは、キリスト教に入信した。クタパン県のキリスト教徒の人口は約 19 万人である¹²⁾ [BPS Kabupaten Ketapang 2024: 201]。

12) 統計局の統計では、キリスト教 (kristen) とカトリック (katolik) という区分が用いられている [BPS

マタン王国は、南西カリマンタン最古の王国であるスカダナ王国を前身とする、ムラユ人たちの王国である。他方、ウルアイ王に関しては、オランダ植民地期の資料が限られている。そのため、管見の限り、周辺地域のムラユ人王国のような統治機構を備えた、ウルアイ「王国」の存在を示す資料はない。そのため、歴史資料からマタン王国とウルアイ王の関係を明らかにすることは困難である。ただし、起源神話や口承伝承から、マタン王国とウルアイ王の関係は、次のように要約することができる。起源神話によれば、スカダナ王国は、ジャワから漂着した王子と、在来女性との婚姻によって創始された。また、在来女性には、6人の年長の姉妹がいたとされており、この年長の姉妹たちの末裔が、ダヤック人たちとされている¹³⁾ [西島2020]。そのため、マタン王国の王国貴族たちとダヤック人たちは、「キョウダイ」関係にあるとされていた。また、クタパン地域の口承伝承によれば、マタン王国の始祖となった姉妹の末子は、ダヤック人たちにとって、儀礼的な土地の支配者であるとされていた。そのため、ダヤック人たちは、マタン王国の王侯貴族たちに、貢納として土地の収穫物を納めなければならなかった [同上論文：121]。

マタン王国とダヤック人たちの「キョウダイ」関係は、マタン王とウルアイ王によって代表されていた [同上論文：121-122]。インドネシア独立以前まで、後背地のダヤック人たちは、マタン王宮で祭典が開催されるさいに、王宮に参集していた [同上論文：122]。口承伝承によれば、ウルアイ王も、他のダヤック人たちとともに、マタン王宮を訪れていた。ダヤック人たちがマタン王宮に参集した時には、マタン王とウルアイ王に代表されるマタン王国とダヤック人たちの「キョウダイ」関係が顕在化した。クタパン地域では、ウルアイ王が、マタン王宮に到着するまでは、儀礼は開始されなかったという伝承や、ウルアイ王とマタン王は隣り合って座っていたという伝承が語られる [同上論文：121]。マタン王とウルアイ王の一体性に代表される、マタン王国とダヤック人たちの「キョウダイ」関係が、この政体の構成原理だった。ウルアイ王とマタン王の関係を語るこれらの口承伝承の内容が、具体的にいつ頃のことを指すのかは不明である。ただし、オランダ植民地体制下でも、ウルアイ王とマタン王の「キョウダイ」関係は継続したことが推察できる。19世紀以降、マタン王国は、オランダ植民地体制に組み込まれた。¹⁴⁾ オランダ植民地政府は、マタン王国とダヤック人の関係に深く干渉することはなかったため、ダヤック人たちによるマタン王国の王侯貴族たちへの貢納は継続した¹⁵⁾ [cf.

↘ Kabupaten Ketapang 2024]。19万人は、両者を合算した数である。また、キリスト教徒の中には、華人やジャワ人なども含まれる。

13) 付言すると、起源神話には様々な異譚がある [cf. Dewall 1862]。

14) ただし、管見の限り、ウルアイ王が、オランダ植民地体制に組み込まれたことを示す資料はない。

15) 当時のウルアイ王の在位期間に関しては、第二次世界大戦中および終戦後の混乱したクタパン県の状況を考慮するならば、ウルアイ王がマタン王宮に訪問していたのは、第二次世界大戦前のことであると考えられる。

Barth 1896: 95, 100–101]。クタパン県のダヤック人集落では、ウルアイ王が、現在のクタパン市内で、第二次世界大戦期までマタン王国の王を務めたグスティ・サウナン（在位期間：1922–44）と邂逅していたことや、グスティ・サウナンが敬意を示すほど、ウルアイ王の権威は高かったという伝承が語られる¹⁶⁾ [cf. 西島 2021: 46]。20世紀期以降も、両者の「キョウダイ」関係は存続していたことが推察できる。¹⁷⁾

ウルアイ王の居住するクリオ川流域のダヤック人たちは、クリオ人と呼ばれる。ウルアイ王の系譜の深度には諸説あり、1997年6月に即位した現在のウルアイ王を7代目とする説、18代目とする説、あるいは51代目とする説などが併存している。¹⁸⁾ 現在のウルアイ王は、1997年6月に神器を相続し、王に即位した。ウルアイ王が相続・管理してきた神器は、3 cm 程の短剣と60 cm 程の笏杖である。両者は一組の神器とされており、「世界 (In. dunia)」を根底から支えていると語られる [西島 2020; 2021; Nishijima 2022]。ウルアイ王は、クリオ地域では、農民として焼き畑を営んでいる。スハルト体制末期まで神器を管理していた先代のウルアイ王（在位期間：1973–97）も、ときおり巡行に出かけるとき以外は、農民として質素な生活を営んでいた。民主化・分権化期に、地域社会の人々の間で、ウルアイ「王国」への関心が高まったことで、現在のウルアイ王は、各地の儀礼や式典などに出席するようになった。儀礼や式典に参加する時には、ウルアイ王は、伝統衣装を身にまとい、神器を携えて、人々の前に登場する。

神器の神聖性を信仰する人々は、九村十長 (Desa Sembilan Domong Sepuluh) と呼ばれる祭祀結社を構成している¹⁹⁾ [西島 2020; 2021; Nishijima 2022]。ウルアイ王の管理する神器は、南西カリマンタン地域では、最も神聖な聖物とされており、王が主宰する神器祭祀には、各地からダヤック人たちが参集する [西島 2020: 129–132]。ウルアイ王の役割は、神器の管理と、ダ

16) 住民へのインタビュー、2016年1月20日、於バトゥ・タジャム集落、クタパン県；住民へのインタビュー、2016年3月17日、於スラカウアン集落、クタパン県。また、20世紀のマタン王とウルアイ王の関係を語る伝承については、Djuweng [1999] も記録している。一般的にダヤック人たちは、グスティ・サウナン以外のマタン王国の王の名前を知らない。そのため、最後の王であるグスティ・サウナンは、歴代のマタン王国の王全体を指す一般名詞として使用されている可能性もある。

17) オランダ植民地体制期に生まれたクリオ川流域のダヤック人集落の古老によれば、年に2回、ダヤック人の慣習長と側近たちが貢納を届けるためにマタン王の下を訪れていた。この時には、ウルアイ王も同行していたという。ただし、この証言も、過去の一般的な内容について語っている可能性もあり、具体的にいつ頃のことについての内容なのかは不明である。

18) 筆者が長期調査を実施した2014年から2016年まで、ウルアイ王の居住集落では7代目あるいは、51代目とされていた [西島 2020: 117]。2023年に筆者が、ウルアイ王の邸宅を来訪したさいには、18代目までの系譜を記したポスターが壁に掛けてあった。

19) スラウェシのブギス・マカッサル人社会に関する人類学的研究では、神器への信仰を核とした祭祀結社は、「神器奉戴共同体」(worship community) と呼ばれてきた [Chabot 1996 (1950)]。筆者は、これまで、九村十長にたいして、神器奉戴共同体という訳語を使用してきた。しかし、ウルアイ王の神器奉戴共同体は、神器の神聖性を信仰し、王と共同で神器祭祀を遂行する人々によって構成されている [西島 2021; 2023]。そのため、九村十長は、日常生活における社会的機能を持ち合わせていない。現在のところ、筆者は、スハルト体制期までの九村十長は、神器への信仰と神器祭祀の開催を目的とした結社的な組織として理解すべきだと考えている。

ヤック人集落への巡行である。ウルアイ王は、神器を儀礼的に適切な状態で管理するために、禁忌を順守し、焼き畑の農耕サイクルに従い、一耕作年度に5つの儀礼を主宰する義務を負う²⁰⁾ [同上論文: 127; 西島 2021: 48; 2023]。クリオ地域の人々の中には、ウルアイ王に、禁忌や義務に服することを求めるものもあり、王は、禁忌や義務に拘束された状態に置かれる。他方、後背地各地では、ウルアイ王は、神聖な来訪者として信奉されてきた [西島 2020: 128]。ダヤック人たちにとって、ウルアイ王の来訪は非日常的な出来事であり、ダヤック人たちは王を歓待した [同所; 西島 2021: 51-54]。神器への信仰の地理的分布は、ウルアイ王の巡行経路と関係しているため、神器への人々の信仰は地理的な濃淡がある。そのため、九村十長は、ウルアイ王と神器の信奉者たちの、人的紐帯によって構成された祭祀結社であると言える。²¹⁾

インドネシア独立期からスハルト体制期まで、九村十長が、クタパン地域の人々の関心を集めることはなかった。しかし、スハルト体制崩壊直後の1998年5月、スハルト体制下で周縁化されていたダヤック人たちが、みずからの政治的プレゼンスを誇示するために、クタパン市内で開催した大規模儀礼の中で、ウルアイ王は、体制に抑圧されてきたダヤック「民族」の全体性と統一性を象徴する王として担ぎ出された²²⁾ [Bamba 2002; 西島 2021]。この「復活」以降、ウルアイ王は、地方社会で注目を集めるようになった。

II 暴動から仲裁へ

1. 中央集権体制の抑圧と抵抗

民主化・分権化期にダヤック人たちの劇場国家が「再現」された背景的要因は、スハルト体制末期から民主化・分権化期にかけての、住民と開発企業の紛争である。スハルト体制期の開発政策の下、数多くの伐採企業が、西カリマンタン州の森林に伐採キャンプを建設したため、ダヤック人たちは、焼き畑や狩猟や天然ゴムの採集など生活の糧を得てきた森林から締め出された。しかし、1990年代にスハルト体制が不安定化すると、ダヤック人たちは、デモや暴動などを通じて、開発に抵抗するようになった。

インドネシア政府は、独立以降、森林や天然資源に対する国家の管理を強化する一方、ア

20) 例えば、労働者として働くこと、宗教に入信することや葬送儀礼に深く関わることは、ウルアイ王の禁忌とされている [西島 2020: 127; 2021: 48]。禁忌に囲まれながら神器の管理に専念しなければならないとされるウルアイ王の役割は、「スケープゴート」としても理解できる [Graeber 2017]。

21) 九村十長が、「領域」として語られるかどうかは、その時々状況と連動している。例えば、1998年の除厄儀礼では、クタパン県におけるダヤック人たちの先住性を主張するために、九村十長が「領域」であることが主張された [Kalimantan Review 1998 Aug.]。後述するように、開発企業と住民の仲裁においても、九村十長が「領域」であることが主張された。ただし、それ以外の場面で、九村十長の領域性が問題化されることはないと言ってよい。

22) 1998年の除厄儀礼の詳細については、別稿 [西島 2021] にて既に論じたため、本稿では割愛する。

ダットに基づいた人々の土地や天然資源の利用を制限してきた [Bedner 2016: 66]。1945 年憲法 33 条 3 項では、国内の土地、水と天然資源は国家の「管理」下に置かれること、そして、これらは「人民」の繁栄のために利用されなければいけないことが定められた。²³⁾ 1960 年土地基本法 2 条では、政府は、土地、水と天然資源に対して「管理権」(In. hak menguasai)を行使することが定められた²⁴⁾ [McCarthy and Robinson 2016: 3]。アダットに基づいた土地の利用権は、国家の利益と衝突しない限りにおいて認められるに過ぎなかった [Bedner 2016: 65]。森林基本法 1967 年 5 号では、国内の国有林は、生産林、保護林や観光林など、森林の機能に基づいて分類され、各森林の管理や用途が定められた。²⁵⁾ その後のスハルト体制期の開発政策では、森林や森林資源が、開発を促進すべき重点分野として位置付けられた [Wollenberg *et al.* 2009: 12]。スハルト体制は、海外投資の規制緩和や森林の事業許可の発行に関する一連の法令を制定し、開発を加速させるための制度を整備した [Hidayat 2016: 38–39]。他方、アダットには、国家の開発にたいして従属的な位置付けしか与えられなかった。さらに、スハルトは、森林の事業許可を国軍幹部や側近に分配することで、権力基盤の安定化のために利用した [Dauvergne 1998: 16]。1970 年代以降、数多くの伐採企業が、西カリマンタン州に進出し、森林を開拓した。伐採企業は、ダヤック人たちが焼き畑、狩猟採集や天然ゴムの採集を営んでいた慣習林を開拓し、伐採キャンプを建設した。国軍や政府を後ろ盾に持つ伐採企業は、ときには強引に、ダヤック人たちを森林から締め出した [Kalimantan Review 1994 Oct.–Des.]。

スハルト体制末期、ダヤック人たちの開発政策に対する不満が、デモや暴動などのかたちで表面化した。1990 年代、国際先住民運動に合流したインドネシア国内の NGO は、アダットを根拠として、政府や企業に、ダヤック人たちの慣習的土地権を訴えた [Davidson 2008: 110–111; Duile 2017: 132–133]。西カリマンタン州では、ダヤック人たちによる開発への抵抗運動が活発化し、クタパン県でも、ダヤック人たちによる開発企業へのデモや暴動が勃発した [Kalimantan Review English Edition 2000 Aug.]。例えば、クタパン県サンダイ郡では、伐採企業 LTW 社が、住民の耕作物を撤去して、「国有地」や「事業地内での農耕禁止」などの看板を立てて住民の立ち入りを制限しただけではなく、河川を封鎖したため、住民たちは生活に支障をきたすようになった。さらに、LTW 社は、許可された範囲を超えて伐採をおこない、住民たちの森林を破壊した。住民たちは、LTW 社に説明を求めたものの、出席したのは事情を知らない社員だった。LTW 社の不誠実な対応に憤慨した住民たちは、同社の敷地内の橋、トラク

23) Undang-Undang Dasar Republik Indonesia.

24) Undang-Undang Nomor 5 Tahun 1960 Tentang Peraturan Dasar Pokok-Pokok Agraria. また、同条項は、1945 年憲法 33 条 3 項の条文を反映している [McCarthy and Robinson 2016: 3]。

25) Undang-Undang Nomor 5 Tahun 1967 Tentang Ketentuan-Ketentuan Pokok Kehutanan. また、同年に発行された政令 1967 年 22 号では、森林は「国家経済のひとつの可能性であり、最大限活用するために処置されなければならない」資源であることが確認された。

ターや車を破壊するなどして、抗議した [Kalimantan Review 1994 Oct.–Des.]. このように、1990年代から2000年代にかけて、クタパン県では、強引な開発にたいする住民たちの不満が爆発し、企業からの補償や、企業の撤退を求める抵抗運動が広がった [Kalimantan Review English Edition 2000 Aug.]。

インドネシア政府は、独立以降、森林を国家経済の成長のための資源と位置付け、開発を促進してきた。とくにスハルト体制期の開発政策の下、政府や軍を後ろ盾として、数多くの伐採企業が、カリマンタンの森林を開拓した。スハルトが事業許可の分配を政権の安定化のために利用してきたことを踏まえるならば、カリマンタンの森林の開発は、体制の安定と表裏一体の関係にあったと言える。しかし、スハルト体制が不安定化する1990年代以降、西カリマンタン州では、強引な開発にたいする、ダヤック人たちの不満と怒りが爆発し、抵抗運動が活発化した。ダヤック人たちは抗議活動を通じて、強引な開発の拒否と伐採企業の撤退を求めた。

2. 民主・分権化期の紛争と仲裁

スハルト体制崩壊後の地方分権化改革により、地方政府が、森林の事業許可の発行に権限を行使するようになった。しかし、事業の許認可は、地方政治エリートたちによる汚職の温床になり、開発企業による強引な開発と、ダヤック人たちによる開発への抵抗は継続した。他方、民主化・分権化以降、企業と住民の紛争において、様々な方法を用いた仲裁が実施されるようになった。仲裁の増加の背景には、アダットを根拠とした慣習的権利の主張に正統性が認められるようになったこと、および、開発企業と住民の紛争を仲裁する方法が整備されるようになったことが挙げられる。²⁶⁾ ダヤック人たちによる企業への激しい抵抗活動は鎮静化する一方、紛争の仲裁が実施されるようになった²⁷⁾ [Berenschot *et al.* 2023; Dhiaulhaq *et al.* 2018]。

民主化・分権化期、中央政府が掌握していた森林の事業許可の許認可権が、地方政府に移譲された結果、汚職が地方に蔓延した。伐採企業や油ヤシ企業などの開発企業は、事業を継続するために、州知事から、県知事、地方議会議員、地方政府の役人、警察、そして、慣習的権威者にまでいたるパトロクライアント関係を構築した [Berenschot *et al.* 2023; Sjafrina *et al.* 2012]。クタパン県では、開発企業は、地方政府から事業許可を取得するために、県知事に「手数料」を支払わなければならなかったとされている [Sjafrina *et al.* 2012: 29]。また、民主化・分権化期に地方自治体の首長の選出に選挙制度が導入されたことで、地元出身の地方政治エリートたちが、地方選挙に出馬するようになった。開発企業から支払われる「手数料」は、地方政治エリートたちの選挙資金として利用されたとされている [ibid.: 29, 34]。

26) 例えば、行政村の設立や慣習林にたいして、大幅に法的な根拠が認められるようになった。

27) 本節における油ヤシ企業と地元住民の対立や紛争解決メカニズムの詳細に関する記述の多くは、[Berenschot *et al.* 2023] に負っている。

開発企業と住民の紛争の原因は多岐にわたるものの、本稿との関係で重要なのは、同意のない土地の収奪と、プラスマ (In. plasma) と呼ばれる衛星農園の利益配当を原因とした紛争である²⁸⁾ [Berenschot *et al.* 2023]。同意のない土地の収奪には、開発企業による住民への不十分な説明や、企業や企業と癒着した有力者たちによる書類の偽装などによる開発が含まれる。開発企業は、事業許可を取得するにあたり、住民からの同意を取り付ける必要がある。しかし、開発企業が、十分に住民の同意を得ないまま事業許可を取得する事例や、一部の有力者のみの同意に基づいて事業許可を獲得する事例が報告されてきた [ibid.: 56–57]。また、西カリマンタン州での油ヤシ企業と住民の紛争の原因として最も大きな割合を占めているのが、「中核企業—小農方式 (In. Perkebunan Inti Rakyat: 以下、PIR 方式)」における衛星農園の利益の配当を原因とした紛争である [ibid.]。PIR 方式とは、企業が管理する中核農園 (In. inti) と、小農たちが管理する衛星農園から構成された油ヤシ農園の開発方式である²⁹⁾ [河合 2021: 23–24]。PIR 方式では、小農たちが油ヤシ企業に土地を譲渡する一方、企業が衛星農園の造成をおこなう。衛星農園で油ヤシ果房の収穫が可能になると、企業から農民に、一部の土地の返還、あるいは衛星農園からの利益の配分がおこなわれる [Berenschot *et al.* 2023: 47]。土地が返還される場合、小農たちは、衛星農園で収穫した果房を、搾油工場を所有する企業に売却する [河合 2021: 24]。小農たちが受け取る利益から、衛星農園の造成にかかった費用が、小農たちの借入金として差し引かれる³⁰⁾ [Berenschot *et al.* 2021: 11; 河合 2021]。衛星農園の利益の配当に関する紛争の原因としては、企業による住民との利益の分配に関する約束の反故、企業から配当される利益への不満、あるいは利益の分配の不透明性などが挙げられる [Berenschot *et al.* 2023: 61–62]。

開発企業への不満を募らせた住民たちは、様々な手段を通じて企業に抗議してきた。住民たちの抗議活動は、開発企業や地方政府へのデモ、道路の封鎖、企業の操業妨害、企業の所有物の強制押収や破壊、そして油ヤシ企業の農園での違法な収穫など多岐にわたる [ibid.: 108]。西カリマンタン州でも、開発企業に対するダヤック人たちの抗議活動が継続した。西カリマンタン州の油ヤシ企業と住民の紛争では、住民たちは、「ポータル (In. portal)」と呼ばれる簡易

28) 本節における紛争の原因や原因の分類は、[Berenschot *et al.* 2023] における油ヤシ企業と住民の紛争の記述に基づいている。ただし、同分類は、伐採企業や産業植林企業など他の開発企業との紛争にも、相当程度当てはまると考えられる。また、西カリマンタン州の油ヤシ企業と住民の間の紛争の原因としては、同意のない土地の収奪と衛星農園の利益の配当を原因とした紛争が大きな割合を占めている [ibid.: 98]。

29) 衛星農園には様々なタイプがある。民主化・分権化期、油ヤシ企業が中核農園と周囲の農園を一元的に管理する統一管理方式が導入された。統一管理方式では、油ヤシ企業が、住民から貸借した土地に農園を開拓する。油ヤシ企業は、小農園を企業の管理下に置くことで、農園の経営を効率化することができる [河合 2021]。統一管理方式では、油ヤシ企業と住民の間で、利益の分配が決められる。植樹から4年から5年経ち、油ヤシの収穫が可能になった後、企業から小農へ利益が分配される [Berenschot *et al.* 2021: 17]。

30) 2007年以降に造営された油ヤシ農園の場合には、農園の20パーセント以上の土地を小農に配当することが企業に義務付けられた [Berenschot *et al.* 2023: 47]。

製の門の設置による企業の農園への立ち入りの妨害や油ヤシ企業の管理する農園における油ヤシの果実の違法な収穫を通じて、企業に抗議してきた³¹⁾ [e.g. Pontianak Post 2020/9/15; Tribun Pontianak 2012/04/10; 2023/03/18]。また、III-2で取り上げるクタパン県の産業植林企業MYW社との紛争では、ダヤック人たちは、道路の封鎖や企業の重機の押収により抵抗してきた [Ekuatorial 2024/05/21; Jaring 2024/05/31]。他方、住民が抗議のために違法行為に及んだ場合、警察に拘束されることもある [Jaring 2024/05/31]。企業と住民の対立が長期化した場合や、緊張関係が高まった場合には、第三者の仲裁による解決が模索される [Dhiaulhaq *et al.* 2018: 66]。

開発企業と住民の紛争の仲裁には、様々な方法が用いられてきた。主要な仲裁方法としては、裁判所、NGO、あるいは州知事、県知事、地方政府の役人や慣習的権威者などの有力者による仲裁がある³²⁾ [Berenschot *et al.* 2023: 175; Dhiaulhaq *et al.* 2018]。NGOや地方政府の役人などの異なる仲裁者が、同一の紛争の仲裁に関与する場合もある [Dhiaulhaq *et al.* 2018]。ただし、住民たちの間では、裁判所に対する不信任が蔓延している [Berenschot *et al.* 2023: 175]。裁判は、手続きが複雑であり、問題の解決までに多額の費用と、判決が出るまでに長い期間を要する。また、裁判では、法的書類の提出が求められる場合もある。ただし、慣習的に土地を利用してきた住民たちにとって、土地の法的権利を証明することは困難である [ibid.: 246]。さらに、裁判において住民が勝訴したとしても、企業が裁判所の決定を履行する保証はない [ibid.: 209]。本稿との関係で重要なのは、地元の有力者による仲裁である³³⁾ [ibid.: 177–178]。西カリマンタン州でも地方議会の議員や、地方政府の役人が仲裁に関与する事例が報告されてきた [Dhiaulhaq *et al.* 2018]。ただし、開発企業と政府や地元の有力者が癒着している場合もあるため、仲裁が適切に機能するとは限らない [Berenschot *et al.* 2023]。

民主化・分権化期以降も、開発企業と住民の間の紛争は継続した。開発企業と住民の間では、企業による強引な事業許可の取得と開発、企業による住民への不十分な説明、企業による住民との約束の反故などを原因とする紛争が頻発してきた。住民たちは、開発企業の強引な開発に抵抗しつつも、様々な第三者を媒介とした仲裁を模索してきた。以下で述べるように、クタパン県では、ウルアイ王、地方政治エリートや慣習長たちが協力関係を結び、紛争を仲裁してきた。

31) 違法な収穫による刑事裁判を担当した経験のあるダヤック人弁護士は、住民たちは、油ヤシ農園が本来は自身の土地であると思い、企業の農園の油ヤシを収穫するのだ、と筆者に語った。

32) 油ヤシ企業と住民の対立の仲裁の場合は、RSPO (Roundtable on Sustainable Palm Oil; 日本語訳：持続可能なパーム油のための円卓会議) も主要な仲裁方法である [Berenschot *et al.* 2023]。

33) 紛争解決における政治エリートとの協力関係は、土地に対する法的所有権の主張よりも効力があることが指摘されている [Berenschot *et al.* 2021: 38]。

III 王と宰相の相補的關係

1. アダットの権威者としての王

スハルト体制崩壊前後に、西カリマンタン州各地で開発企業へのダヤック人たちの不満が噴出する中、クリオ地域でも、開発企業とダヤック人たちの間で紛争が勃発した。強引な開発へのダヤック人たちの不満が爆発する中、神器の管理と巡行を役割としていたウルアイ王は、両者の仲裁者としての役割を果たすことで、アダットの権威者として活動するようになった。

1999 年、クタパン県ウルスンガイ郡で、伐採企業 AK 社に対する、ダヤック人たちの抗議デモが勃発した。³⁴⁾ スハルト体制期、AK 社は、クリオ地域の森林を開拓し、伐採キャンプを開いた。AK 社の幹部は、後述するパンリマ (panglima) と呼ばれるダヤック人の慣習的権威者を介して、先代のウルアイ王とも交流があり、王が主宰する神器祭祀を後援していた。ただし、一部のダヤック人たちの間では、AK 社が森林を開拓していることへの不満があった。抗議デモの参加者たちは、AK 社の伐採キャンプ内に侵入し、企業の事務所を放火した。他方、AK 社は橋を切り落とすことで、住民たちの敷地内への侵入を阻止しようとした。ただし、すべてのクリオ地域の人々が、暴力的な抗議デモに賛同したわけではなく、デモに否定的な人々もいた。そもそも神器を管理するウルアイ王の居住するクリオ地域では、流血を伴うような騒乱は、慎むべきだとされていた。しかし、数百人が参加する大規模な抗議デモが勃発したことで、AK 社は、ウルスンガイ郡での操業を一時休止せざるを得なくなった。AK 社の幹部は、ウルアイ王に、企業と抗議デモの参加者との仲裁儀礼の実施を依頼した。³⁵⁾

ウルアイ王は、隣接する地域のダヤック人慣習長や、デモの参加者たちを自身の家屋に集め、九村十長の名の下に、デモの参加者たちに、アダットに基づいた制裁を課した。³⁶⁾ 参加者たちへの制裁の根拠の一つとして、参加者たちが暴力的行為に及んだ結果、ウルアイ王の居住地を「擾乱した (In. melecehkan)」ことが挙げられた。³⁷⁾ アダットの制裁では、デモの参加者たちによって、アダットの制裁を実施した証拠として、ウルアイ王とダヤック人慣習長たちに、野菜や米など比較的安価な賠償が支払われた。³⁸⁾ AK 社へのデモの事例は、神器の管理者だったウルアイ王が、「領域」内の秩序の維持に関して、アダットの権威者として行動するようになった転換点だった。

34) 1999 年当時、現在のウルスンガイ郡は、隣接するサンダイ郡の一部だった。

35) 制裁儀礼に係る費用は、AK 社が負担した。

36) ウルアイ王が保管している制裁の「決定書 (In. Surat Keputusan)」を参照した。

37) 二つ目の制裁の理由としては、スハルト体制崩壊後の騒乱の中で、宥和を宣言した 1998 年の除厄儀礼の精神を損なったことが挙げられた。また、インドネシア独立以降、神器とウルアイ王の神聖性が、暴力的な民族紛争や和平と関係付けられてきたことは、別稿〔西島 2021〕を参照。

38) ウルアイ王へのインタビュー、2017 年 8 月 27 日、於ウルスンガイ郡。

スハルト体制崩壊後、伐採企業が代わって、油ヤシ企業がクタパン地域に進出し、森林を開拓した。2011年、ウルスンガイ郡で、油ヤシ企業であるWHP社とダヤック人たちの間で紛争が起きた。WHP社は、そもそもクタパン県南部に位置するプサグアン地域で操業していた。2009年、WHP社は、ウルスンガイ郡に油ヤシ農園を開拓するための事業許可を取得した。事業許可の取得に際して、WHP社は、クリオ地域の住民たちとの顔合わせと称した会合を開催した。しかし、WHP社は、この会合の出席者の名簿の署名を、環境影響評価書（AMDAL; Analisis Mengenai Dampak Lingkungan Hidup）を取得するための書類に流用した。そのため、WHP社は、住民たちからの十分な同意を得る前に、約2万4千haの事業許可を取得することができた [Kalimantan Review 2011 Mar.; Pontianak Post 2011/02/11]。

WHP社への制裁では、パンリマの称号を持つダヤック人の慣習的権威者B氏（以下、パンリマB）が主導した。パンリマとは、指導力や社会的功績が認められたダヤック人に与えられる称号である。パンリマBは、スハルト体制期から民主化・分権化期にかけて、クタパン地域で最も有力なパンリマだった。パンリマBの活動拠点は、都市と後背地の中継地点であるサンダイ郡である。パンリマBは、地方政治エリートから市井の人々まで広範な人々の間に影響力を持っている社会的名士である。パンリマBの活動の中でも重要なのは、都市部の地方政治エリートと、後背地の人々の媒介者としての役割である。スハルト体制期から民主化・分権化期にかけて、地方政治エリート、地元警察や企業幹部などが、パンリマBの下を頻繁に訪問してきた。³⁹⁾ パンリマBは、行事や儀礼に参加するさい、全身白色の衣装という人々の注目を引く服装で登場する。パンリマBは、弁舌にも長けており、低く通る声による演説は、聴衆を引き付ける魅力を持っている。パンリマBは、そのカリスマ性により、クタパン地域の後背地における有力なダヤック人の慣習的権威者としての名声を確立した。⁴⁰⁾

WHP社のウルスンガイ郡への進出は、ウルアイ王やパンリマBなど地元の慣習的権威者ですら関知していなかった。住民たちからの同意を得ることなく森林を開拓したWHP社にたいし、パンリマBとウルアイ王は、西カリマンタン州森林局の敷地内で、制裁儀礼を実施した。パンリマBの説明によれば、パンリマBは、WHP社のクリオ地域への進出を知った後、ウルアイ王を制裁儀礼に誘ったという。パンリマBは、ウルアイ王を制裁儀礼に誘った理由として、クリオ地域がウルアイ王の「土地 (In. areal)」だからだ、と筆者に語った。パンリマBとウルアイ王は、WHP社が事業許可を取得した経緯を確認するため、ジャカルタの森林省を訪問し、当時の大臣と面会した。⁴¹⁾ また、当時、ダヤック人の伐採企業の社長であり、2014年に西カリ

39) 筆者がB氏の家を訪問していた時には、パンリマBに、家庭問題を相談するために訪れてきたものもいた。ただし、この時には、パンリマBは不在だったため、親族が対応した。

40) パンリマBは、先代のウルアイ王とも親交があり、B氏がパンリマの称号を授与された時には、先代の王が同席した [西島 2021: 49]。

41) ウルアイ王へのインタビュー、2024年8月21日、於ウルスンガイ郡。

マンタン州から国会議員に選出されたミカエル・ジェノ（国会議員の在任期間：2014–2019）が、パンリマBとウルアイ王に、自宅を宿泊地として提供した。⁴²⁾ 2011年2月、西カリマンタン州森林局において、パンリマB、ウルアイ王、企業幹部と森林局長が出席する会議が開催され、WHP社が、ウルスンガイ郡の森林の一部から撤退すること、およびWHP社に制裁儀礼を下すことが決定された [*Kalimantan Review* 2011 Mar.]。会議の後、森林局の敷地内で、パンリマBは、米を蒔き、鶏と豚を屠り、企業へ制裁儀礼を実施した。WHP社に対して、制裁として豚、鶏、陶器、皿、そして250万ルピアの制裁金の支払が課された [*ibid.*]。

制裁儀礼の実施には、パンリマB、ウルアイ王、そして地方政治エリートの人的紐帯が重要な役割を果たした。パンリマBは、森林局という公共の場で制裁儀礼を実施することで、地元メディアの注目を集めることを計画していた。じっさいに、制裁儀礼の後、地元新聞とNGO発行の雑誌が、WHP社に対する制裁儀礼に関する記事を掲載した [*ibid.*: 19; *Pontianak Post* 2011/02/11]。ただし、州の森林局を管轄する森林省は有力な省庁であり、局内で制裁を実施することは困難なことだった。パンリマBは、警察に拘束される可能性も考慮していた。パンリマBとウルアイ王が、制裁を強行した背景には、西カリマンタン州知事だったコルネリス（在任期間：2008–18）との関係があった。コルネリスは、2008年に、約50年ぶりにダヤック人として、西カリマンタン州知事に就任した地方政治エリートであり、パンリマBとも交流があった。もし制裁儀礼を実施した結果、警察に拘束された場合、パンリマBとウルアイ王は、コルネリスからの支援を期待できただろう。他方、コルネリスに、事前に制裁儀礼の実施を通達すれば、許可されない可能性もあった。パンリマBとウルアイ王は、制裁儀礼を終えた後に、州知事邸を訪問し、企業に制裁を課したことを報告した。⁴³⁾ このように、パンリマBとウルアイ王は、ダヤック人の実業家や地方政治エリートたちとの人的紐帯を巧みに利用することで、アダットの権威者として、企業に制裁を課すことができた。

ウルアイ王が、アダットの権威者としての地位を獲得する過程は、スハルト体制末期以降のダヤック人たちの不満の爆発と抵抗活動の活発化に対応している。ウルアイ王は、自身が居住するクリオ地域で、開発企業と住民が対立する中、紛争の仲裁に関与した。ただし、政治経済的に無力なウルアイ王が、紛争の仲裁という世俗的な領域において、影響力を行使するためには、企業幹部や地方政治エリートなどの有力者たちとの協力関係が不可欠だった。ウルアイ王は、パンリマBを媒介として、有力者たちとの人的紐帯を構築することで、従来の神器の管理と巡行という役割に加え、アダットの権威者という新しい役割を担うようになった。

42) ウルアイ王へのインタビュー、2017年8月27日、於ウルスンガイ郡、パンリマBへのインタビュー、2023年9月1日、於サンダイ郡。

43) パンリマBへのインタビュー、2017年8月20日、於クタパン県サンダイ郡；ウルアイ王へのインタビュー、2024年8月21日、於ウルスンガイ郡。

2. 「宰相」の登場

ウルアイ王のアダットに関する権威が、広範な地域で起きる紛争と結びつくためには、有力者との緊密な協力関係を構築する必要があった。2020年以降、ウルアイ王と都市部の有力な地方政治エリートの間で、相補的關係が構築された。民主化・分権化期、スハルト体制期までクタパン県政府の要職を占めていたムラユ人やジャワ人に代わって、ダヤック人の政治エリートたちが台頭するようになった。さらに、2010年以降は、ダヤック人政治エリートたちが県知事ポストを独占するようになった。しかし、後背地のダヤック人たちにとって、都市部を拠点に活動する地方政治エリートたちは、迂遠な存在である。とくに地方選挙に出馬する政治エリートたちは、選挙期間中には、積極的に後背地の集落を訪問するものの、選挙が終われば、後背地の集落を訪問することはほとんどない。地方政治エリートたちが、ダヤック人たちとの距離ある関係を埋めるためには、頻繁に後背地の集落を来訪し、ダヤック人たちの直面する問題に対処することで、有能な指導者として承認される必要があった〔西島 2021〕。

2020年、ウルアイ王は、クタパン県政府の役人だったQ氏を、「王国」の宰相に任命した。⁴⁴⁾ 宰相任命の背景には、「王国」復興に関する、ウルアイ王による、Q氏の貢献への期待があった。⁴⁵⁾ Q氏は、クタパン県出身のダヤック人であり、インドネシア国内の名門ガジャマダ大学で修士号を取得した生え抜きの地方政治エリートだった。2021年には、ダヤック人の県知事によって、40代にして、官房長官に抜擢された。ダヤック人たちの間では、Q氏は、次世代の指導者とみなされており、じっさいに2024年8月、Q氏は、クタパン県知事候補として選挙への出馬を表明した。宰相への任命以降、Q氏は、各地のダヤック人集落での儀礼や集会に、「王国」の慣習の権威者として訪問した。また、Q氏は、集落の慣習長とは別に、10人の「王国」の慣習長を任命した。「王国」の慣習長たちの役割は、クタパン市内で開催される定期的な会合への出席やQ氏とともに各地のダヤック人集落を訪問することである。⁴⁶⁾ Q氏が、集落を訪問する時には、ウルアイ「王国」の紋章と、宰相独自の紋章を施した上着を着用する。Q氏に同伴する慣習長や側近たちも、「王国」の紋章を付したTシャツや、「王国」を象徴する色である黄色の鉢巻を着用して訪問する。これらの衣装や鉢巻を着用することで、Q氏たちが、「王国」の一員として、集落を訪問していることを顕示できる〔e.g. *Tribun Pontianak* 2022/03/04〕。また、民主化・分権化期、企業と住民の紛争では、第三者による仲裁が用いられるようになった。Q氏は、慣習長や側近たちとともに、各地のダヤック人集落を訪問し、仲裁儀礼を率いた。Q氏は、紛争が発生した地域が、ウルアイ「王国」の「領域」の一部であることを根拠に、アダッ

44) ウルアイ王は、かつて別のダヤック人男性を、パンリマに任命したこともある。

45) ウルアイ王は、たとえQ氏が官房長官でなくなったとしても、Q氏の宰相としての地位が変更されることはないと述べ、「王国」の役職と地方政府とは区別されていることを強調していた。

46) 「王国」の慣習長S氏とのインタビュー、於ウルスンガイ郡。

トを用いて仲裁を主導した。本節では、Q氏が率いた仲裁儀礼の中でも、クタパン県南部ジュライウル郡スマトゥン行政村と県北部シンパンウル郡スマンダンキリ行政村で実施された儀礼に焦点を当てる〔地図1参照〕。これらの事例から、宰相とウルアイ王の間で相補的關係が構築されたことを明らかにする。

ジュライウル郡では、油ヤシ企業と地元住民の間で、衛星農園の利益の配分をめぐる紛争が頻発した。⁴⁷⁾ 油ヤシ企業 USP 社は、ジュライウル郡で操業を開始して 10 年以上が経過していた。ただし、住民たちが、USP 社に土地を譲渡したにもかかわらず、USP 社が住民と約束した衛星農園の収益の配分はおこなわれてこなかったため、両者は対立していた [Mzknews.co 2022/02/25]。さらに、2022 年 2 月、同郡の男性が、企業の油ヤシ農園の果房を違法に収穫したことで、州警察に拘束された。男性が、地元の郡警察ではなく、州警察に拘束されたこと、そして、警察が男性の逮捕を家族に知らせなかったことに対して、数百人の住民たちが、郡警察の前に集まり抗議した [ibid.]。さらに、住民たちは、USP 社に抗議するためにポータルを設置し、道路を封鎖した [ibid.]。USP 社と住民の間で緊張が高まる中、USP 社社員と同郡の慣習長たちが、Q 氏の下を訪問し、仲裁を依頼した [Tribun Pontianak 2022/03/04]。2022 年 3 月、Q 氏は、ジュライウル郡スマトゥン行政村で、USP 社と住民の仲裁儀礼を主導した。Q 氏は、県政府の役人、警察署長たちを連れ、ジュライウル郡を訪問し、制裁儀礼を実施した [ibid.]。儀礼では、USP 社に対して、アダットに基づいた制裁が課され、同社は決定に従い、住民たちに、椀と中国製の壺を支払った [ibid.]。他方、住民たちは、ポータルを開け、道路封鎖を解除した [ibid.]。さらに、儀礼の参加者たちは、USP 社と住民の和解の証として、柱を建立した。Q 氏と慣習長たちは、祝詞とともに、酒を柱に捧げ、豚と鶏を屠った。そして、Q 氏は、企業と住民の合意の証として、柱にウルアイ王権を象徴する黄色の布を結んだ。⁴⁸⁾ 宰相は、オンライン記事のインタビューの中で、次のように述べた。

アダットによる制裁は、慣習長たちによって決定された。制裁儀礼は、宰相、あるいは王国と感情的・構造的な紐帯を持つ慣習長および呪術師たちによって実行された。そのため、私は官房長官としてこの儀礼に参加し、宰相として儀礼を率いたのだ。[ibid.]

上記の発言からも、Q 氏が、官房長官としての地位と、「王国」の宰相としての慣習的権威の両方を根拠に、仲裁儀礼を主導したことが指摘できる。さらに、2022 年 9 月 10 日、Q 氏は、シンパンウル郡スマンダンキリ行政村でも、MYW 社と住民の仲裁儀礼を主宰した。同地域で

47) 管見の限り、現在のウルアイ王は、ジュライウル郡に巡行をおこなったことはなく、王との関係は希薄な地域だった。

48) Tion. 2022/03/05. Patih Jaga Pati Dirikan Tugu Perjanjian. <https://www.youtube.com/watch?v=gT1e8wvmNNo&t=163s>, (accessed 2025/02/09).

の紛争の原因は、MYW社が住民たちからの十分な同意を得ることなく、開発を強行したことにある。2010年以降、MYW社は、住民との会合を開催してきたものの、住民からの同意は得られなかった。しかし、MYW社は、一部の住民たちからの同意に基づいて事業許可を取得し、住民の農地や慣習地を開拓した [Ekuatorial 2024/05/21]。開発に反対する住民たちは、デモ、道路の封鎖や企業の重機を強制的押収など、様々な対抗策や抗議活動を実施してきた。抗議活動では、反対派の住民の中からも逮捕者が出るようになった [Jaring 2024/05/31]。また、MYW社が開拓した事業地にて、シンパンウル郡と、同郡に隣接するシンパンドゥア郡の間で境界問題が発生し、住民間の対立に発展した⁴⁹⁾ [Berita Investigasi 2022/02/03]。Q氏が、官房長官の名の下、MYW社に操業を停止するように通達を出したものの、MYW社は操業を継続した。2022年9月、Q氏は、警察署員、郡長、ダヤック慣習評議会や慣習長たちとともに、シンパンウル郡を訪問し、MYW社にアダットによる制裁を課した [Tribun Pontianak 2022/09/15]。制裁の理由としては、MYW社が、問題が発生した集落の境界での操業の停止に関する官房長官の命令を無視したこと、そして、操業を継続した結果、住民間の対立を誘発したことが挙げられた [ibid.]。Q氏は、制裁儀礼に集まった人々の前で演説をおこない、自身の宰相としての役割について次のように説明した。

九村十長とは、〔「王国」の〕領域の名前だった。〔九村十長は〕デサダラット・パンタイカプアス地域〔カプアス川中流域?〕、ウルランダック地域（ランダック県内陸部）、ウルカプアス地域〔カプアス川上流域〕、（中略）クンダワンガン・スアカン地域〔クンダワンガン川流域〕、そして中カリマントン地域を含んでいる。⁵⁰⁾ ウルアイ王を、映画に出てくるような王と思ってはいけない。〔ウルアイ王は〕自動車も豪華な王宮も持っていない。私は、宰相として、ダヤック人の祖先から継承したアダットを守護しなければならない。（中略）私は、この領域の内部で起こったことを、知らなければならないのだ。あらゆる騒乱や不安を知らなければならない。私は、〔九村十長を〕守護しなければならない。対応しなければならない。耳を傾けなければならない。〔これは〕干渉ではない。介入でもないのだ。⁵¹⁾ [亀甲弧内は筆者による補足。以下、同様]

49) ニュース記事の報道と、筆者が仲裁儀礼への参加者に確認（2024年8月21日、於ウルスンガイ郡）した内容を総合すると、係争の対象となった土地が、シンパンドゥア郡側にとっては、同郡の行政境界に含まれていたのに対して、シンパンドゥア郡の住民にとっては慣習的に利用してきた土地だったことが争いの原因であった。

50) 演説の中のこの箇所では、九村十長に含まれる地域が列挙されているが、一部省略した。また、演説の中で挙げられた地域は、行政的単位ではなく、慣習的な呼称で呼ばれている。慣習的な呼称は、漠然とした地理的範囲を指す。このことから、九村十長の範囲は、線的に区切られた領域というよりは、漠然とした地域の集合としてとらえられていると言える。

51) Tion. 2022/09/12. Patih Jaha Pati Saat Sidang Adat Di Rumah Batang Pasir. <https://www.youtube.com/watch?v=LqCp1RGuQug>, (accessed 2024/07/27).

上記の演説では、九村十長は「王国」の「領域」であること、ウルアイ王は政治経済的に無力であるため、宰相が「王国」の「領域」として、「領域」内の問題に対処しなければならないことが述べられている。また、上記の演説の箇所に引き続き、Q氏は、「王国」の領域はインドネシア政府に譲渡されたことを述べて、県政府の役人である自身に仲裁を率いる責任があることを強調した。⁵²⁾ MYW社は、アダットの決定に従い、賠償金、銅鑼、および中国製の壺を住民に支払った〔Tribun Pontianak 2022/09/15〕。Q氏は、県政府の権限により紛争が発生した集落の境界を決定すること、県政府が決定を下すまで、同地におけるMYW社の操業を停止すること、住民が押収した企業の重機は郡警察を通じて返却されることなどを含む計14の決定を下した⁵³⁾〔*ibid.*〕。

民主化・分権化以降も継続する開発企業と住民の紛争では、第三者による仲裁が模索されてきた。Q氏は、宰相として任命されて以降、開発企業とダヤック人たちの紛争の仲裁を主導し、後背地のダヤック人たちの問題に積極的に関与する姿勢と、みずからの指導力を示してきた。そして、Q氏は、アダットを根拠として紛争の仲裁を実施することで、「王国」の「領域」内の秩序の維持を担う慣習的権威者としての役割を確立した。⁵⁴⁾ 慣習的権威を確立することで、Q氏は、官房長官と宰相の地位を両立させた。他方、Q氏の宰相としてのアダットを根拠に仲裁を率いることの正統性の源泉は、ウルアイ王の権威である。⁵⁵⁾ Q氏が、宰相としての影響力を拡大させたことで、アダットの権威者としてのウルアイ王と、世俗的な有力者としての宰相の相補的關係が構築された。

IV ウルアイ「王国」の「再現」

2024年5月2日から4日まで間、クタパン市内で、「ウルアイ王国九村十長ジャガ・パティ宰相領の集会所（以下、集会所）」の落成式が開催された。⁵⁶⁾ 「宰相領」（In. *kepatihan*）に定訳はなく、また、九村十長との異同は明確でないものの、宰相領は、九村十長が、宰相の管轄する「領域」であることを強調するための表現だろう。⁵⁷⁾ 集会所は、ダヤック人たちが集まる場

52) Tion. 2022/09/12. Patih Jaha Pati Saat Sidang Adat Di Rumah Batang Pasir. <https://www.youtube.com/watch?v=LqCp1RGuQug>, (accessed 2024/07/27).

53) ただし、この仲裁以降も、企業と住民の間、そして住民同士の間でも、対立が継続している〔Ekuatorial 2024/05/21; Jaring 2024/05/31〕。

54) じっさいの仲裁では、Q氏の主導の下、紛争が発生した土地のアダットに基づいて、慣習長たちが企業に制裁を課してきた。

55) ウルアイ王自身は、宰相が対応しても問題が解決しない場合は、自身が問題に対処するのだと述べていた。

56) 本章の式典の記述に関しては、煩雑さを避けるため、細部は省略してある。

57) インドネシア語では、語幹が役職者を指す場合、共接辞 *ke-an* を付すことで、当該役職者が管轄する場所や領域を指す。

所になると同時に、文化活動の拠点になることを目的に建設された。集会場の柱や壁には、ダヤック「民族」を象徴するモチーフが彫刻されており、集会所が、ダヤック人たちのための施設であることが視覚的に表現されている。⁵⁸⁾ 集会所を舞台とした落成式を通じて、アダットの権威者であるウルアイ王と、世俗的権力者である宰相の関係を軸としたウルアイ「王国」が「再現」された。また、落成式の開催期間中には、集会所の広間の天井に黄色の布が掛けられているだけでなく、集会所前の広場に設置された来客用のテントにも黄色の布が使用されており、落成式が、ウルアイ「王国」の行事として開催されていることが示された。⁵⁹⁾

集会所の落成式は、クタパン県の公的機関やその職員たちの協力の下、開催された。クタパン県政府のダヤック人高官が実行委員長を務めたり、後背地の郡長であり慣習的権威者でもあるN氏が一部の儀礼の調整役を務めたりするなど、県政府の役人たちは、落成式の実施に協力した [Kabar Daerah Kalbar 2024/05/01]。また、落成式の期間中には、クタパン県知事やサンガウ県知事代行、パンリマBやダヤック人民族組織の代表者やダヤック人慣習長など、ダヤック人社会の有力者たちが出席した。また、国軍の中佐、クタパン県議会副議長などの公的機関の代表者、ムラユ人、ジャワ人、マドゥラ人や華人などの各民族集団の組織の代表者も落成式に出席した [DPRD Kabupaten Ketapang 2024/05/04]。ジャワ人やムラユ人の民族組織の代表者たちは、新聞のインタビューの中で、集会所が、異なる民族集団あるいは宗教の信徒たちの「調和 (In. kerukunan)」や「親睦 (In. silaturahmi)」のための施設となることへの期待を述べ、集会所の完成を祝福した [Pontianak Post 2024/05/06]。ダヤック人の有力者たちだけでなく、他民族集団の有力者たちも、落成式に駆け付けた背景には、他民族集団の有力者たちの間でも、Q氏の官房長としての実力が承認されていたことがあると言える。⁶⁰⁾ 落成式を盛大に開催する上で、行政的地位と慣習的地位を両立させたQ氏の影響力は不可欠だった。

3日間の落成式は、クタパン県各地のダヤック人たちのアダットに則った儀礼と行事から構成された。⁶¹⁾ 5月2日、ウルアイ王、Q氏、そしてダヤック人の慣習長たちが、集会所に集まり、慣習長の主導の下、クリオ地域とビハ地域（クリオ川流域とビハ川流域）のアダットに則り、除厄儀礼を実施した [Suara Pemred 2024/05/02]。集会所での儀礼の後、参加者たちは、パワン川の畔まで移動し、ウルアイ王とQ氏が川で水浴びをおこない、災厄を洗い流した。参加者は、

58) TVRI Kalbar. 2024/05/11. Peresmian Balai Kepatihan Jaga Pati. <https://www.youtube.com/watch?v=STsXv4owzkg>, (accessed 2024/07/15).

59) TVRI Kalbar. 2024/05/11. Peresmian Balai Kepatihan Jaga Pati. <https://www.youtube.com/watch?v=STsXv4owzkg>, (accessed 2024/07/15).

60) Q氏への広範な支持は、同年11月に実施されたクタパン県知事選挙の結果にも示されている。Q氏は、クタパン県知事候補として選挙に立候補し、県内すべての郡で最高の得票数を獲得し勝利した。

61) 別稿 [Nishijima 2021] では、2020年までの儀礼における、ダヤック人「王国」へのムラユ人王国の影響を指摘した。他方、以下で述べるように、2024年に実施された集会所の落成式では、集会所の彫刻や式を構成する儀礼など、随所で、ダヤック人たちの「王国」としての独自性が強調されていた。

再び集会所に戻り、集会所の完成を祝福するための儀礼を実施した [ibid.]。初日の締めくくりとして、参加者たちは、集会所内の広間で、ティマン・タンドウック・サンギヤン・ホランと呼ばれる、ウルアイ王が主宰する神器祭祀でおこなわれる、男女2人1組による舞踏を舞った [ibid.: cf. 西島 2020: 132]。

5月3日は、一連の落成式の日程の中でも重要な行事が実施された。最初に、クタパン県南部プサグアン地域（トゥンバンティティ郡近辺）と北部シンパンドウア地域（シンパンドウア郡近辺）のアダットに則り、ウルアイ王やQ氏たちを集会所に迎え入れる儀礼がおこなわれた。そして、プサグアン地域のアダットに則り、ダヤック人の伝統的な蒸留酒であるトゥアック（In. tuak）が、ウルアイ王とQ氏たちに振舞われた [Suara Pemred 2024/05/04]。その後、ウルアイ王やQ氏たちは、落成式の会場に移動した [ibid.]。移動の場面では、ウルアイ「王国」におけるウルアイ王、慣習的権威者および従者たちの関係が顕在化した。ウルアイ王とQ氏は、並んで移動した。ウルアイ王とQ氏の両脇には、伝統衣装に身を包んだ数人の男性たちが、棒を垂直に掲げて付き従った。男性たちが掲げる棒の上端部には、天蓋として黄色い布が、両者の頭上に掲げられた。⁶²⁾ ウルアイ王たちの移動中、ジュライ地域（ジュライウル郡近辺）のダヤック人たちの音楽が演奏された。さらに、行事が開催される場所に到着すると、Q氏たちは、クンダワンガン地域の舞踏と音楽により歓迎された [ibid.]。

その後、落成式の参加者たちは、集会所の広場で、ダヤック人を象徴するとされるモチーフが彫刻された高さ約4メートルの鉄木製の塔を建立する行事を実施した。⁶³⁾ 参加者たちは、事前に、クタパン県内各地から、一握りの土と一杯の水を持参するように要請されていた。⁶⁴⁾ 塔の建立前、ウルアイ王、Q氏、そしてダヤック人たちは、塔の土台として組まれた木枠の中に、各々持ち寄った土と水を納めた。ウルアイ「王国」直属の慣習長S氏が、「ウルアイ王の領域である九村十長を統合いたします」という内容を含む祝詞を唱える中、ウルアイ王とQ氏が、短剣の剣先を空に向けた後、短剣の先で木枠の中に納められた土と水に触れる儀礼的所作により、土と水を統合した。⁶⁵⁾ その後、ダヤック人民族組織の男性たちが、雄叫びを上げながら塔を持ち上げ、建立した。⁶⁶⁾ インドネシア国営放送の動画の中で、ダヤック人の慣習的権威者であるN氏は、各地から持ち寄った土と水を統合し、その上に塔を建てることで、ダヤック人た

62) TVRI Kalbar. 2024/05/11. Peresmian Balai Kepatihan Jaga Pati. <https://www.youtube.com/watch?v=STsXv4owzkg>, (accessed 2024/07/15).

63) ダヤック人たちの間では、彫刻を施した木製の塔は、パンタック（In. pantak）と呼ばれる。集会所の前に建立された塔も、パンタックである。

64) ウルアイ王の説明によれば、土と水は、九村十長中から集めたということだった。

65) TVRI Kalbar. 2024/05/11. Peresmian Balai Kepatihan Jaga Pati. <https://www.youtube.com/watch?v=STsXv4owzkg>, (accessed 2024/07/15).

66) TVRI Kalbar. 2024/05/11. Peresmian Balai Kepatihan Jaga Pati. <https://www.youtube.com/watch?v=STsXv4owzkg>, (accessed 2024/07/15).

ちの「統合」を表現しているのだと、塔建立の意義を説明した。⁶⁷⁾

5月4日は、集会所の広場で、クタパン県知事の歓迎儀礼、武術の披露と『ダヤック人の主権宣言』と題された本の出版記念式が開催された。出版記念式に先立ち、クタパン県知事の訪問を歓迎するため、クタパン県北部サトン地域（マタンヒリールウタラ郡近辺）のダヤック人たちのアダットに則った儀礼が実施された [Delik.com 2024/05/09]。さらに、ムラユ人、ジャワ人、マドゥラ人や華人の代表者たちが落成式に参加する中、インドネシア武術連盟 (Ikatan Pencak Silat Indonesia) によって、ムラユ人、マドゥラ人およびブギス人などクタパン県に居住する他民族集団の武術が披露された [ibid.]。落成式での他民族集団の武術の披露に関して、Q氏は前日に、次のように説明した。

このこと〔様々な民族集団の武術を披露すること〕は、ジャガ・パティ宰相領が、民族や宗教の別に関わらず、あらゆる人々を保護し守護するということを示している。つまり、目的はわれわれが統合することなのだ [Suara Pemred 2024/05/04]。

上記の発言では、地方社会で多民族が共生する上で、ダヤック人たちが主導的役割を果たすべきであるという、Q氏の願望が述べられていると言える。その後、ダヤック人の研究者と、地元ジャーナリストによって執筆された『ダヤック人の主権宣言』と題された著作の出版記念式が開催され、出版社から著者、そして著者からQ氏に同著が進呈された [Delik.com 2024/05/09]。

集会所の落成式を構成していたのは、ウルアイ王の神器祭祀と各地のアダットに基づいた舞踏や儀礼だった。これらダヤック人たちの多様なアダットの諸要素を統合した求心的核は、宰相とウルアイ王の相補的關係だった。「王国」の宰相であるQ氏が、落成式の主宰者としての役割を果たした一方、ウルアイ王は、Q氏が宰相として落成式を主宰することの正統性の源泉としての役割を果たした。そして、各地から参集したダヤック人たちが、演者、舞台装置係や観衆の役割を担うことで、ウルアイ「王国」が「再現」された。落成式で「再現」されたウルアイ「王国」は、マタン王とウルアイ王の相補的關係を中核としていた政体とは異なる。現在のウルアイ「王国」の「再現」は、過去への回帰ではなく、歴史的に周縁化されてきたダヤック人たちが、かつて存在していたかもしれないみずからの「王国」を構築する探求的な運動である。

ウルアイ「王国」の「再現」は、ダヤック人たちにとっての、理想的な社会の姿を可視化させることでもある。ダヤック人たちのアダットは多様であり、ダヤック人たちは、体系化されたアダットを共有しているわけではない。ダヤック人たちは、儀礼や舞踏など各地のダヤック

67) TVRI Kalbar. 2024/05/11. Peresmian Balai Kepatihan Jaga Pati. <https://www.youtube.com/watch?v=STsXv4owzkg>, (accessed 2024/07/15).

人社会のアダットの諸要素を組み合わせることで、サブグループの垣根を超えた「民族」としての「統合」を演出すると同時に、他民族集団のアダットを包摂することで、多民族的な社会におけるダヤック「民族」の主導的立場を顕示した。他方、他民族集団の有力者たちも、Q氏の地方政治役人としての政治力を承認していた。スハルト体制期まで、ダヤック人たちが、政治経済的に抑圧されていたことを考慮するならば、地方社会における「民族」の主導的立場とは、ダヤック人たちが希求する理想的な社会の姿であると言える。したがって、ウルアイ「王国」は、ダヤック人たちを「民族」として「統合」し、ダヤック「民族」を中心に他の民族集団が統合されている状態を、社会の理想的な姿として演出するために、「再現」されたことが指摘できる。

結 論

民主化・分権化期のインドネシア地方社会に関する先行研究では、「王国」の台頭は適切に位置付けられてこなかった。本稿の目的は、西カリマンタン州のダヤック人の「王国」を事例に、民主化・分権化期の地方社会で、いかにアダットの権威者としての王と、地方政治エリートや地方政府の結合により、劇場国家としての「王国」が再現されてきたのかを明らかにすることだった。

本稿では、第一に、ダヤック人「王国」の台頭してきた背景的要因として、開発企業と住民の紛争と仲裁に焦点を当てた。スハルト体制期末期、ダヤック人たちは強引な開発政策に対して、抗議活動を展開してきた。開発にたいするダヤック人の抗議活動は、ときに暴動に発展する場合もあった。しかし、民主化・分権化期以降、開発の影響が生活に深く浸透する中で、ダヤック人たちの抗議活動における要求は、開発の拒否や企業の撤退から、企業の対応や地方政府の介入などに移行してきた。西カリマンタン州の開発企業とダヤック人たちの仲裁においては、慣習的権威者や地方政治エリートたちによるアダットを用いた仲裁が実施されるようになった。

第二に、アダットの権威者としてのウルアイ王と、政治的有力者としての宰相の間に、相補的關係が確立されてきた過程を明らかにした。スハルト体制崩壊後、ウルアイ王は、開発企業と住民の紛争の仲裁をするようになり、アダットの権威者としての役割を担うようになった。さらに、ウルアイ王から宰相としての慣習的権威を与えられた地方政治エリートが、後背地各地の油ヤシ企業とダヤック人の紛争の仲裁を実施するようになった。ウルアイ王が、アダットの権威者としての役割を果たす一方で、宰相は、「王国」の「領域」としての九村十長内の紛争を仲裁する主導するという、「王国」の分権体制が確立した。また、各地のダヤック人たちも、宰相の慣習的権威者としての地位を承認し、仲裁を求めてきた。

第三に、集会所の落成式の事例に焦点を当て、インドネシア独立以前の、下流の政治的権力と上流の儀礼的権威の相補的關係が復活することで、劇場国家としてのウルアイ「王国」が、

「再現」されたことを明らかにした。落成式は、ウルアイ「王国」の行事の一環として開催された。各地のダヤック人たちのアダット、塔の建立、そして、他民族集団のアダットによって落成式は構成された。落成式でのウルアイ「王国」の「再現」によって表現されたのは、ダヤック人たちの「統合」と、地方社会における主導的立場だった。開発によって周縁化されてきたダヤック人たちにとって、ウルアイ「王国」を「再現」することは、サブグループの垣根を越えた「民族」としての「統合」と、地方社会における主導的立場を表現するための手段だったと言える。また、ウルアイ「王国」は、かつてのマタン王国の王とウルアイ王の相補的關係ではなく、ダヤック人の政治エリートとウルアイ王の相補的關係によって「再現」された。そうすることで、ダヤック人たちは、みずからの「民族」の王国として、ウルアイ「王国」を「再現」することができた。ダヤック人たちは、ウルアイ「王国」を「民族」の王国として「再現」することで、みずからが希求する理想的な社会の姿を表現したことが指摘できる。

民主化・分権化期の「王国」の台頭は、アダットの権威者として台頭した王と、政治的権力の担い手としての地方政治エリートや地方政府の結合による、劇場国家の再現として理解できる [cf. 永淵 2007]。スハルト体制末期以降、地方社会では宗教紛争、民族紛争や企業と住民の土地紛争などが噴出する中、アダットは、紛争の仲裁や制裁の根拠として用いられてきた [Henley and Davidson 2007]。王たちの中には、アダット復興を背景に、アダットの権威者として台頭を目指すものたちもいた。他方、地方政府や地方政治エリートたちは、地域観光、文化保全や地方政治など様々な理由を背景として、王との協力関係を構築してきた。ただし、王と政治権力の関係は、両者が迂遠な関係にある事例から、王と地方政治エリートや地方政府が結合している事例、そして、王が地方自治体の長として政治権力と一体化している事例まで、様々なバリエーションを含んでいるはずである。また、どのような経緯で、王がアダットの権威者になったのか、どのように王と政治権力が関係を構築されてきたのか、そして、どのように「王国」が立ち現れているのかは、地方社会の状況によって異なるはずである。今後は、比較の観点から、民主化・分権化期の「王国」の多様な動態を明らかにする必要がある。

謝 辞

本研究の一部は、JSPS 科研費 JP23K17107 の助成を受けておこなわれたものです。現地調査では、多くの人々の協力を得ました。また、査読者の方からは貴重なコメントを賜りました。ここに記してお礼申し上げます。

参 考 文 献

- Badan Pusat Statistik Kabupaten Ketapang. 2024. *Kabupaten Ketapang Dalam Angka 2024*. Ketapang: Badan Pusat Statistik Kabupaten Ketapang.
- Bamba, John. 2002. Re-emergence of the Raja Hulu Ai: Some Motives and Impacts. *Borneo Research Bulletin*

- 33: 67–74.
- . ed. 2008. *Mozaik Dayak: Keberagaman Subsuku dan Bahasa Dayak di Kalimantan Barat*. Pontianak: Institut Dayakologi.
- Barth, J. P. J. 1896. *Overzicht der Afdeeling Soekadana*. Verhandelingen van de Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen 50: 1–141 + bijlagen.
- Bedner, A. 2016. Indonesian Land Law: Integration at Last? And For Whom? In *Land and Development in Indonesia: Searching for the People's Sovereignty*, edited by John F. McCarthy and Kathryn Robinson, pp. 63–88. Singapore: ISEAS – Yusof Ishak Institute.
- Berenschot, Ward et al. 2021. *Palm Oil Expansion and Conflict in Indonesia: An Evaluation of the Effectiveness of Conflict Resolution Mechanisms*. Leiden: POCAJI.
- . 2023. *Kehampaan Hak: Masyarakat vs Perusahaan Sawit di Indonesia*. Jakarta: Yayasan Pustaka Obor Indonesia.
- Chabot, H. Th. 1996 (1950). *Kinship, Status and Gender in South Celebes*, translated by Richard Neuse. Leiden: KITLV Press.
- Dauvergne, Peter. 1998. The Political Economy of Indonesia's 1997 Forest Fires. *Australian Journal of International Affairs* 52(1): 13–17.
- Davidson, Jamie S. 2008. *From Rebellion to Riots: Collective Violence on Indonesian Borneo*. London: The University of Wisconsin Press.
- Dewall, H. von. 1862. Matan, Simpang, Soekadana, de Karimata-eilanden en Koeboe (Wester-afdeeling van Borneo). *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* 11: 1–146.
- Dhiaulhaq, Ahmad et al. 2018. Resolving Industrial Plantation Conflicts in Indonesia: Can Mediation Deliver? *Forest Policy and Economics* 91: 64–72.
- Djuweng, Stephanus. 1999. Dayak Kings among Malay Sultans. *Borneo Research Bulletin* 30: 105–109.
- Duile, Timo. 2017. Being Dayak in West Kalimantan: Constructing Indigenous Identity as a Political and Cultural Resource. In *Continuity under Changing in Dayak Societies*, edited by Cathrin Arenz, Michaela Haug, Stefan Seitz and Oliver Venz, pp. 123–140. Wiesbaden: Springer Nature.
- ギアツ, クリフォード. 1990. 『ヌガラ——19世紀バリの劇場国家』小泉潤二(訳). 東京: みすず書房. (原著 Geertz, Clifford. 1980. *Negara: The Theatre State in Nineteenth-century Bali*. New Jersey: Princeton University Press.)
- Graeber, David. 2017. The Divine Kingship of the Shilluk: On Violence, Utopia, and the Human Condition. In *On Kings*, by David Graeber and Marshall Sahlins, pp. 377–464. Chicago: Hau Books.
- Henley, David; and Davidson, Jamie S. 2007. Introduction: Radical Conservatism – The Protean Politics of Adat. In *The Revival of Tradition in Indonesian Politics: The Deployment of Adat from Colonialism to Indigenism*, edited by Jamie S. Davidson and David Henley, pp. 21–69. Oxon: Routledge.
- Hidayat, Herman. 2016. *Forest Resources Management in Indonesia (1968–2004): A Political Ecology Approach*. Singapore: Springer.
- 河合真之. 2021. 「インドネシアにおけるアブラヤシ農園企業による小農支援方式(PIR)の変遷」『アブラヤシ農園問題の研究Ⅱ【ローカル編】——農園開発と地域社会の構造変化を追う』林田秀樹(編), 23–46 ページ所収. 京都: 晃洋書房.
- Klinken, Gerry, van. 2007. Return of the Sultans: The Communitarian Turn in Local Politics. In *The Revival of Tradition in Indonesian Politics: The Deployment of Adat from Colonialism to Indigenism*, edited by Jamie S. Davidson and David Henley, pp. 149–169. Oxon: Routledge.
- Kurniadi, Bayu. 2019. *Defending the Sultan's Land: Yogyakarta, Aristocratic Power and Control over Land in Post-Autocratic Indonesia*. Ph.D Thesis of Australia National University.
- McCarthy, John; and Robinson, Kathryn. 2016. Land, Economic Development, Social Justice and Environmental Management in Indonesia: The Search for the People's Sovereignty. In *Land and Development in Indonesia: Searching for the People's Sovereignty*, edited by John F. McCarthy and Kathryn Robinson, pp. 1–31. Singapore: ISEAS – Yusof Ishak Institute.
- 永岡康之. 2007. 『バリ・宗教・国家——ヒンドゥーの制度化をたどる』東京: 青土社.
- 西島 薫. 2020. 「神器が織りなす政体——西部カリマンタンのダヤック人王権の事例から」『東南アジア研究』57(2): 109–135.
- . 2021. 「ダヤック人祭司王「復活」の歴史的経緯——南西カリマンタンにおけるウルアイ王の事例にもとづいた考察」『アジア・アフリカ地域研究』21(1): 36–66.

- . 2023. 「『本来の土地の主』の儀礼に関する覚書——西カリマンタン州のクリオ人とその祭祀王の事例から」『Language and Linguistics in Oceania』15: 57–71.
- Nishijima, K. 2022. The Dayak 'Kingdom' and Indigenous Sovereignty in Ketapang Regency, West Kalimantan. *Journal of the Anthropological Society of Oxford-Online* 13(2): 103–130.
- Schulte-Nordholt, Henk. 1981. Negara: A Theatre State? *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 137(4): 470–476.
- . 1996. *The Spell of Power: A History of Balinese Politics, 1650–1940*. Leiden: KITLV Press.
- Scott, James. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven and London: Yale University Press.
- Sjafrina, Almas et al. 2012. *Menguras Bumi Merebut Kursi: Patronase Politik-Bisnis Alih Fungsi Lahan di Kabupaten Kutai Barat dan Ketapang*. Indonesia Corruption Watch.
- Song, Seung-Won; and Mansur, Mustafa. 2021. The Revival of Adat and the Articulation of the 'Kingdom Slot' in Loloda, North Halmahera, Indonesia. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 177(2–3): 312–343.
- Stuart-Fox, David J. 2002. *Pura Besakih: Temple, Religion and Society in Bali*. Leiden: KITLV Press.
- 杉島敬志. 2006. 「中部フローレスにおけるアダットの現在」『現代インドネシアの地方社会——ミクロロジのアプローチ』杉島敬志；中村潔（編），235–264 ページ所収。東京：NTT 出版。
- Tambiah, Stanley Jeyaraja. 1985. A Reformulation of Geertz's Conception of the Theater State. In *Culture, Thought, and Social Action: An Anthropological Perspective*, edited by Stanley Jeyaraja Tambiah, pp. 318–338. Cambridge, Massachusetts and London, England: Harvard University Press.
- Wollenberg, Eva et al. 2009. Between State and Society: Decentralization in Indonesia. In *The Decentralization of Forest Governance: Politics, Economics and the Fight for Control of Forests in Indonesian Borneo*, edited by Moria Moeliono, Eva Wollenberg, and Godwin Limberg, pp. 3–23. London and Sterling: Earthcan.

新聞・雑誌

- Kalimantan Review*. 1994 Oct.–Des. Konflik Antara Masyarakat Adat Dengan Perusahaan. HPH Dan HTI Di Kabupaten Ketapang Kalbar.
- . 1998 Aug. Kesaksian P. Mateus Juli, Pr “Saya Rela Mati Demi Orang Dayak.”
- . 2011 Mar. PT. WHP Dihukum Adat Oleh Raja Ulu Ai'k-Ketapang.
- Kalimantan Review English Edition*. 2000 Aug. The Indigenous Peoples versus the Company.
- Pontianak Post*. 2009/12/22. Penobatan Majelis Raja Kerajaan Matan Tanjungpura.
- . 2011/02/11. Keriau Tolak Sawit.

法令

- Peraturan Pemerintah Republik Indonesia Nomor 21 Tahun 1970 Tentang Hak Pengusahaan Hutan Dan Hak Pemugutan Hasil Hutan.
- Undang-Undang Dasar Republik Indonesia.
- Undang-Undang Nomor 5 Tahun 1960 Tentang Peratutan Dasar Pokok-Pokok Agraria.
- Undang-Undang Nomor 5 Tahun 1967 Tentang Ketentuan-Ketentuan Pokok Kehutanan.

オンライン新聞記事・資料等

- Berita Investigasi. 2022/02/03. Sengketa Lahan Konsesi PT Mayawana Persada Berbuntut Berbuntut Panjang. <https://beritainvestigasi.com/sengketa-lahan-konsesi-pt-mayawana-persada-berbuntut-berbuntut-panjang/>, (accessed 2024/08/04).
- Cribb, Robert. 2006-Feb. Back on the Throne. *Asian Currents*. <https://asaa.asn.au/asian-currents-html-archives/2006/asian-currents-06-02.html>, (accessed 2025/04/22).
- Delik.com. 2024/05/09. Peresmian Balai Kepatihan Jaga Pati. <https://delikcom.com/peresmian-balai-kepatihan-jaga-pati/>, (accessed 2025/04/22).
- Detik.com. 2022/12/10. 264 Kerajaan Ramaikan Festival Adat Budaya Nusantara II di Jateng. <https://www.detik.com/jateng/jawa-tengah-meriah/d-6453400/264-kerajaan-ramaikan-festival-adat-budaya-nusantara-ii-di-jateng>, (accessed 2024/08/06).
- DISKOMINFO Prov. Kaltim. 2023/09/24. Komitmen Jaga Tradisi Adat Budaya di Tanah Kutai Kartanegara, Selehuudin dan Rima Hartati Hadiri Pembukaan Era. <https://diskominfo.kaltimprov.go.id/budaya/erau-adat->

- pelas-benua-2023-komitmen-jaga-tradisi-di-tanah-kutai-kartanegara, (accessed 2024/08/04).
- DPRD Kabupaten Ketapang. 2024/05/04. Peresmian Balai Kependidikan Jaga Pati Laman Sembilan Domong Sepuluh. <https://dprd.ketapangkab.go.id/peresmian-balai-kepatihan-jaga-pati-laman-sembilan-domong-sepuluh/>, (accessed 2024/07/27).
- Ekuatorial. 2024/05/21. Trauma Para Korban Hutan Tanaman Industri. <https://www.ekuatorial.com/2024/05/trauma-para-korban-hutan-tanaman-industri/>, (accessed 2024/07/28).
- Jaring. 2024/05/31. Setelah Ladang dan Hutan Diserobot Mayawana. <https://jaring.id/setelah-ladang-dan-hutan-diserobot-mayawana/>, (accessed 2024/07/28).
- Kabar Daerah Kalbar. 2024/05/01. Sekda Alexander Wiloy Pimpin Rapat Persiapan Peresmian Balai Kependidikan. https://kalbar.kabardaerah.com/2024/05/01/sekda-alexander-wiloy-pimpin-rapat-persiapan-peresmian-balai-kepatihan/#google_vignette, (accessed 2025/02/24).
- Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan. 2018. Digitalisasi Data Keraton. <https://kebudayaan.kemdikbud.go.id/ditkt/wp-content/uploads/sites/6/2018/12/Keraton-Benua-Raja-Aceh-Tamiang.pdf>, (accessed 2024/07/28).
- Mzknews.co. 2022/02/25. Ratusan Massa Tutup Jalan Bagi Angkutan Kelapa Sawit PT USP. <https://mzknews.co/2022/02/25/ratusan-massa-tutup-jalan-bagi-angkutan-kelapa-sawit-pt-usp/>, (accessed 2024/07/28).
- Pontianak Post. 2020/9/15. Warga Sukaramai Portal Kebun PT KPAM. <https://pontianakpost.jawapos.com/ketapang/1462717853/warga-sukaramai-portal-kebun-pt-kpam>, (accessed 2024/08/04).
- . 2024/05/06. Bupati Ketapang: Jadikan Balai Kependidikan Tempat Pelestarian Seni dan Budaya. <https://pontianakpost.jawapos.com/ketapang/1464622103/bupati-ketapang-jadikan-balai-kepatihan-tempat-pelestarian-seni-dan-budaya>, (accessed 2025/02/24).
- Republika. 2022/10/04. Kepaksian Pernong Lampung Menganugerahi Gelar Adat kepada Para Tokoh Nasional. <https://news.republika.co.id/berita/rj8gte385/kepaksian-pernong-lampung-menganugerahi-gelar-adat-kepada-para-tokoh-nasional>, (accessed 2024/07/28).
- Suara Pemred. 2024/05/02. Patih Jaga Pati dan Raja Hulu Aik Hadiri Ritual Adat Menait Bale Kependidikan. <https://www.suarapemredkalbar.com/read/ketapang/02052024/patih-jaga-pati-dan-raja-hulu-aik-hadiri-ritual-adat-menait-bale-kepatihan>, (accessed 2025/04/24).
- . 2024/05/04. Patih Jaga Pati dan Raja Hulu Aik Hadiri Ritual Adat Pendirian Pantar/Ponti/Pantak Padagi. <https://www.suarapemredkalbar.com/read/ketapang/04052024/patih-jaga-pati-dan-raja-hulu-aik-hadiri-ritual-adat-pendirian-pantarpontipantak-padagi#>, (accessed 2024/07/28).
- Tion, S., T. 2022/03/05. Patih Jaga Pati Dirikan Tugu Perjanjian. <https://www.youtube.com/watch?v=gT1e8wvmNNo&t=163s>, (accessed 2025/02/09).
- . 2022/09/12. Patih Jaga Pati Saat Sidang Adat Di Rumah Batang Pasir. <https://www.youtube.com/watch?v=LqCp1RGUqUg>, (accessed 2024/07/27).
- Tribun Pontianak. 2012/04/10. Alat Berat Perusahaan Ditahan Warga. <https://pontianak.tribunnews.com/2012/04/10/alat-berat-perusahaan-ditahan-warga>, (accessed 2024/08/04).
- . 2017/09/19. Raja-raja Hadiri Festival Keraton 2017 Matan Tanjungpura. <https://pontianak.tribunnews.com/2017/09/19/raja-raja-hadiri-festival-keraton-2017-mantan-tanjungpura?page=all>, (accessed 2024/08/04).
- . 2022/03/04. Patih Jaga Pati Kerajaan Hulu Aik Pimpin Ritual Hukum Adat Terhadap PT USP/FR. <https://pontianak.tribunnews.com/2022/03/04/patih-jaga-pati-kerajaan-hulu-aik-pimpin-ritual-hukum-adat-terhadap-pt-uspfr>, (accessed 2024/08/04).
- . 2022/09/15. Melanggar Adat Karena Buka Lahan Tanpa Izin, Patih Jaga Pati Pimpin Hukum Adat PT Mayawana Persada. <https://pontianak.tribunnews.com/2022/09/15/melanggar-adat-karena-buka-lahan-tanpa-izin-patih-jaga-pati-pimpin-hukum-adat-pt-mayawana-persada>, (accessed 2024/08/04).
- . 2023/03/18. PT Bumi Pratama Khatulistiwa Belum Laksanakan Konversi, Petani Sawit dari 4 Desa Blokir Jalan. <https://pontianak.tribunnews.com/2023/03/18/pt-bumi-pratama-khatulistiwa-belum-laksanakan-konversi-petani-sawit-dari-4-desa-blokir-jalan>, (accessed 2024/08/04).
- TVRI Kalbar. 2024/05/11. Peresmian Balai Kependidikan Jaga Pati. <https://www.youtube.com/watch?v=STsXv4owzkg>, (accessed 2024/07/15).